

藝術学関連学会連合 2010 年度シンポジウム
「変容する〈芸術〉生成の「場」

【趣旨】

〈芸術〉と〈芸術にあらざるもの〉との境界線。それは作者の作り出した作品が、観者という第三者の目に触れて下される評価に基づく。その意味で〈芸術〉とは、作品の公開にあたって生まれるものであるとの見方を可能とする。そのような、いわば人と人の関係性の中に生成する〈芸術〉とは、きわめて社会的な存在であり、これらをつなぐ「場」のあり方も〈芸術〉生成に深く関わる問題といえよう。

現代的視点に立つならば、この〈芸術〉生成の「場」の役割を、美術館や劇場など各種の文化施設が果たしてきたことは間違いない。中でも 18 世紀にヨーロッパで誕生した美術館は、およそ百年後の日本に近代化装置の一つとしてもたらされ、長らくその中心に君臨してきた。当初、美術館は出自たる西洋に倣い、建物自体を厳めしく荘厳したり、ガラスケースを介した新たな鑑賞作法を強いることで、〈芸術〉の特権性を高めることに一役買ったが、一方で日常空間から〈芸術〉を切り離す役目をも努めることとなった。

ところで〈芸術〉を民度の有力なバロメーターとする通念は、「美術」「芸術」の啓蒙を目的とする文化施設の建設を国や自治体に積極的に促したが、今やそれらは箱物と揶揄され、その経営や存続をめぐる議論も喧しい。その引き金となった近年の経済状況は、そもそも欧米と異なって我が国の文化施設の多くが経済活動の象徴として生み出されたという、文化行政の貧困さを露呈するとともに、美術館の真価とは何か、〈芸術〉は何故必要かという重大な問いを私たちに突きつけている。

しかしその一方で、概ね前世紀 80 年代以降、〈芸術〉が、従来の美術館や文化ホールという「場」を離れ、社会生活の現に営まれる様々な場において、多様な人々の参加を不可欠の要因として成り立とうとする新たな動向が生まれ、次第に広がりを見せている。倉庫や閉鎖工場、廃校などを拠点とする様々なオルタナティブなスペースへ、あるいは広域の農村や勢いを減じかけたまちの中へ、あるいは教育・医療・福祉の現場へ、〈芸術〉は飛び出し、これまで芸術とは「無縁」であるかのような立場におかれてきた人々の参加をも誘発し、政治・経済・文化的等々の現実的諸問題と切り結びながら生成しようとしている。

他方また現代社会は、複製技術と「大衆的」メディア、さらには電子情報ネットワーク等の爆発的発達のもとで、〈芸術〉を広範な大衆の中に解き放つてきた。この点に注目するなら、映像に限定してみても、ビルの壁面のスクリーンやリビングルームの巨大液晶画面、また携帯サイズの小さな液晶画面を通して、圧倒的に大量な人々のもとで、生活との明確な「切断」なしにいわばユビキタスに、〈芸術〉は生成しているともいえる。

こうして〈芸術〉生成の「場」の変容は、〈芸術と生活の切断〉や〈作者—作品—鑑賞者〉関係などの変容をも随伴しながら、〈芸術〉とは何かという問いを深部から投げかけるにいたった。

本シンポジウムは、現代的視座に立ちながら、〈変容する〈芸術〉生成の「場」〉の提起する諸問題について、芸術学関連の各専門分野から横断的かつ鋭角的に論じ合い、解明の契機を探ろうとするものである。